日蓮大聖人御書全集

桟敷女房御返事（さじきのにょうぼうごへんじ）

（無量無辺の功徳の事（むりょうむへんくどくのこと））

新版1704～1705

桟敷女房御返事（無量無辺の功徳の事）

建治元年（'75）5月25日　54歳　桟敷女房

女人は水のごとし、うつわ物にしたがう。女人は矢のごとし、弓につがわさる。女人はふねのごとし、かじのまかするによるべし。しかるに、女人は、おとこぬす人なれば女人ぬす人となる。おとこ王なれば女人きさきとなる。おとこ善人なれば女人仏になる。今生のみならず、後生もおとこによるなり。しかるに、兵衛のさえもんどのは法華経の行者なり。たといいかなることありとも、おとこのめなれ

ば、法華経の女人とこそ仏はしろしめされて候らんに、
また我とこころをおこして、法華経の御ために御かたびら
おくりたびて候。

法華経の行者に二人あり。聖人は皮をはいで文字を
うつす。凡夫はただひとつきて候かたびらなどを法華経の
行者に供養すれば、皮をはぐうちに仏おさめさせ給うな
り。この人のかたびらは、法華経の六万九千三百八十四の
文字の仏にまいらせさせ給いぬれば、六万九千三百
八十四のかたびらなり。また六万九千三百八十四の仏、

一々、六万九千三百八十四の文字なれば、このかたびらもまたかくのごとし。

たとえば、はるの野の千里ばかりにくさのみちて候わんに、すこしきの豆ばかりの火をくさひとつにはなちたれば、一時に無量無辺の火となる。このかたびらも、またかくのごとし。一つのかたびらなれども、法華経の一切の文字の仏にたてまつるべし。

この功徳は、父母・祖父母、乃至無辺の衆生にもおよぼしてん。まして、我がいとおしとおもうおとこ・こは申す

に及(およ)ばずと、おぼし思(おぼ)しめすべし。恐々謹言(きょうきょうきんげん)。

五月二十五日(ごがつにじゅうごにち)　日蓮(にちれん)　花押(かおう)

さじき女房御返事(さじきにょうぼうごへんじ)